

都立青山高校 入学式 祝辞

2025 年 4 月 8 日

ご紹介いただきました、青山高校同窓会 外苑会会長の長久保でございます。私はちょうど半世紀前、1975 年に青高に入学しました。

同窓会を代表いたしまして、お祝いの言葉を述べさせていただきます。80 期、281 名の新入生の皆さん、ご入学おめでとうでございます。そして、ご臨席の保護者の皆様には心よりお祝い申し上げます。

青高は、今年の推薦入試では 56 人の定員に対して 238 人が応募、倍率 4.25 は都立高最高で屈指の人気難関校です。そんな厳しい受験を乗り越えて迎えた今日のこの日、喜びもひとしお、のことと存じます。

青高での門出でにあたり、校歌の成り立ちについて、皆さんの先輩のひとりとして、その歴史をお話しさせていただきたいと思えます。

青高に校歌が誕生したのは、1958 年 9 月、今から 67 年前のことです。青高は今年で創立 85 年ですから、創立当初には、今の校歌は存在しないことが分かります。

では、どのようにして、校歌が誕生したのでしょうか。誕生からさかのぼること 5 年前。1953 年後期の生徒総会で校歌をどうするかという議論が生徒の中から始まったそうです。その曲調について『寮歌的なもの』と『格調あるもの』とで意見が対立し、一旦、議論がストップしてしまったかと思うと、新聞部が、校歌は必要か、否かなど全校生徒に対してアンケート調査を行うなどさまざまなアプローチを試みたそうです。

当時の先輩たちが、5 年という歳月を費やし、自分たちの意見を真剣に闘わせ、議論の末に完成をみた、その労作が今の校歌なのです。

歌詞は 1958 年 2 月の全校投票で、生徒の応募作約 60 編から「ベスト 3」を決定、第 1 位は杉本清治さん（1959 年卒）の作品でした。歌詞の歌い出しは当初「緑豊かな神宮の…」になっていましたが、作曲時には現在の「早緑匂う神宮の…」と手が加えられたそうです。

この在校生の歌詞に曲をつけたのが、1945 年卒の先輩・小杉太一郎さんです。作曲をされた小杉さんは、青高の前身である府立第十五中を卒業後、東京音楽学校（現・東京芸大）の作曲科で学び、すでに当時、映画音楽の世界でも活躍していた著名な作曲家で、その作品はいまも公演されています。

このように青高の校歌は、在校生の歌詞に先輩が曲をつける形で誕生した、私たちの大先輩たちの努力の結晶として、出来上がった校歌であること、ぜひ憶えていてください。

校歌の歌詞には、「希望」の泉、「知識」の泉、「文化」の泉、というフレーズに呼応するかたちで「自由」の光、「平和」の光、「理想」の光、という言葉が並びます。その言葉から皆さんは何を感じとることができるでしょうか。

私には、戦中、戦後の混乱期を生き抜いてきた先輩たちが、新しい時代を切り拓いていこう、という未来への強い思いが、それぞれのフレーズに込められているように思えてなりません。

後ほど、在校生のコーラスで校歌の紹介がありますが、先輩方が歌詞に込めた思いを受けとめて、これからの時代を皆さんが果敢に切り拓いていくことを切に願っています。

入学したばかりの皆さんに、卒業後のことはピンと来ないと思いますが、少しばかり同窓会の紹介をさせてください。私ども同窓会では、卒業生相互の親睦を図る事業、在校生の教育活動支援事業の2つを事業の柱として活動を展開しております。在校生支援の柱は2017年からスタートした奨学金給付制度です。毎年6名を基本に奨学金を給付しています。皆さんの先輩である青高卒業生たちの母校への想いの詰まった制度です。制度を活用していただき、充実した高校生活を送っていただく一助になれば、何より幸いです。この「外苑会」奨学金応募の案内は、学校の専用サイトにも掲示していただきますので、奨学金受給を希望する皆さんは、必ずご覧になってください。

卒業して長い歳月が流れました。この年になっても、青高でよかったと思うことは「絆」です。同級生はもちろん先輩方や後輩たちと今も続く交流です。シンプルに「青高」という共通項だけで続く、しなやかな絆は、人生の宝物です。どうか、今日から始まる青高での出会いを大切に、たくさんの仲間たちと楽しい高校生活を過ごしてください。

結びに、新入生の皆さんのご活躍、ご臨席の皆様のご健勝をまた、青高のますますの発展をお祈り申し上げまして、お祝いの言葉とさせていただきます。本日はまことにおめでとうございました。